

葛の葉伝説 —和泉市信太地域における狐女房譚の比較研究

山本 えりか

(堀田 穰ゼミ)

目次

はじめに

第1章 概要

1 異類婚姻譚

2 信太地域周辺に伝わる狐女房譚

(1) 信太森葛葉稲荷神社周辺に伝わる葛の葉伝説

(2) 聖神社周辺に伝わる葛の葉伝説

(3) 高梨氏が登場する信濃堂の伝説

(4) 赤井信濃守が登場する信濃堂の伝説

第2章 信太地域周辺に伝わる狐女房譚の比較

1 比較

2 安倍晴明と信太陰陽師・藤村氏

第3章 葛の葉伝説と芸能

おわりに

はじめに

人間と人間でない異類（動物、精霊など）とが婚姻を結んだとされる説話を異類婚姻譚という。そのうち狐女房譚は、子別れの場面などが文芸作品のモチーフにされたり、歌舞伎『蘆屋道満大内鑑』などの演劇作品においても現在でも人気を博し続けている。そんな狐女房譚について、昔話や異類婚姻譚を研究している中村とも子氏は「昔話『狐女房』を考える 一口承が受容するものしないもの—」の中で、「(前略) 狐女房は [葛の葉]、夫は [保名]、子どもは [童子丸] という固有名詞を持つことが多く、狐女房は別れ際に《恋しくば訪ね来てみよ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉》という有名な歌を残す。登場者に名前がつくことだけを取り上げても、他の異類婚姻譚とは異なる印象を受ける。」(中村とも子 1995)¹と述べている。

狐女房が夫子と別れる際に残す歌には「和泉な

る 信太の森」という地が登場し、そこは葛の葉の出生地とされる。この信太の森はかつて和泉国の信太地域にあった鬱蒼と生い茂った森のことである。その信太地域にも狐女房譚が伝えられているが、葛の葉伝説と呼ばれる信太森葛葉稲荷神社周辺に伝わる伝説、聖神社周辺に伝わる伝説、そして二つの信濃堂にまつわる伝説という四つの異なる狐女房譚が存在する。そのうち信太森葛葉稲荷神社、聖神社周辺に伝わる葛の葉伝説には葛の葉・安倍保名・童子丸（のちの安倍晴明）が登場する。しかし、信濃堂にまつわる伝説には、同じ信太地域に伝わる伝承であるのにも関わらず全く違う人物が登場する。本論ではそれらの四つの狐女房譚を比較し、それぞれの相互関係を検討していく。

第1章 概要

1 異類婚姻譚

異類婚姻譚には、人間の男性と異類が婚姻を結ぶ異類女房と、人間の女性と異類とが婚姻を結ぶ異類婿がある。その中でも狐女房譚は、人間の男性と狐とが婚姻を結ぶ動物異類婚姻譚である。狐女房譚の他の異類女房や異類婿には見られない特徴として考えられているのは、先述の通り中村とも子氏が述べている「昔話『狐女房』を考える 一口承が受容するものしないもの—」の中で、「(前略) 狐女房は [葛の葉]、夫は [保名]、子どもは [童子丸] という固有名詞を持つことが多く、狐女房は別れ際に《恋しくば訪ね来てみよ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉》という有名な歌を残す。登場者に名前がつくことだけを取り上げても、他の異類婚姻譚とは異なる印象を受ける。」(中村とも子 1995)²である。では、子別れの場面で葛の葉が残した歌に登場する「和泉なる信太の森」とは、どこを指しているのだろうか。

大阪府和泉市信太地域、かつての和泉国には古代より信太の森とよばれる鬱蒼とした森があった。そこは歌枕の地として平安貴族たちに多く詠まれ、清少納言の枕草子にも「信太のもり」と記されている。³数多くの狐女房譚で狐女房の名前が葛の葉とされているが、葛の葉の出生地として伝えられているのが信太の森である。そんな信太の森周辺には四つの狐女房譚が存在する。葛の葉伝説と呼ばれる、信太森葛葉稲荷神社周辺に伝わる伝説、聖神社周辺に伝わる伝説。そして、信濃堂にまつわる伝説。こちらは地侍の高梨氏という人物と、赤井信濃守という人物がそれぞれ登場する。

吉田幹生氏は「異類婚姻譚の展開 一異類との別れをめぐる一」の中で、異類婚姻譚の方向性として次の三つを指摘できると述べている。

I 子の誕生を語り始祖伝承としての性格が強いもの

II 異類としての存在を強調し忌避する性格が強いもの

III 神仙譚の枠組みの中で語ろうとするもの⁴

これらに信太地域周辺に伝わる四つの狐女房譚を分類するとすれば、どの方向性に当てはまるだろうか。

2 信太地域周辺に伝わる狐女房譚

次に、信太地域周辺に伝わる四つの狐女房譚をみていく。(1) 信太森葛葉稲荷神社周辺に伝わる葛の葉伝説、(2) 聖神社周辺に伝わる葛の葉伝説、(3) 高梨氏が登場する信濃堂にまつわる伝説、(4) 赤井信濃守が登場する信濃堂にまつわる伝説の順となっている。

(1) 信太森葛葉稲荷神社周辺に伝わる葛の葉伝説

信太森葛葉稲荷神社周辺に伝わる葛の葉伝説。以下、葛の葉伝説（信太森葛葉稲荷神社）と略称。

「約千年余り前、今の大阪市阿倍野の里に安倍保名が住んでいた。

父は豪族であったが人にだまされ所領を没収されたので、保名は家の再興を願い、当地信太森葛葉稲荷に日参していた。

ある日のこと、数人の狩人に追われた一匹の白狐を助けた。そのとき、保名は手きずを受けその場に倒れた。

白狐は葛の葉という女性に化け、保名を介抱して家まで送りとどけた。それから数日後葛の葉は保名を見舞い、やがてお互いの心が通じ合い、妻になり童子丸という子供をもうけた。

その子が五才のとき、正体がわかり、『恋しくば尋ねてきてみよ 和泉なる 信太の森の うらみ 葛の葉』の一首を障子に書き残して信太の森へ帰ったといい伝えられる。(後略)」（信太森葛葉稲荷神社案内板より）⁵

大阪府和泉市王子町の信太の森の鏡池史跡公園には信太の森ふるさと館がある。そこでは葛の葉伝説についての紹介がされているが、同じ伝説がその常設展示図録の中で「葛の葉伝説其ノ二 ～葛葉稲荷神社周辺に伝わるおはなし～」として記載されている。そこでは案内板に書かれている内容以外に、石川悪右エ門と数人の狩人たちが白狐を追っており、手きずを負った保名は家の再興もできないならと短刀を抜いたところを楠木の下から女性が出てきて止める。正体が露見する場面では、葛の葉が庭先の乱菊を見て故郷を思って正体を現し、童子丸に見られる。その後、保名と童子丸は信太の森を訪れるも、今までなかった葛が神社の社頭一面に生い茂っていたとある。⁶



図1 信太森葛葉稲荷神社（撮影：山本）

(2) 聖神社周辺に伝わる葛の葉伝説

聖神社周辺に伝わる葛の葉伝説。以下、葛の葉伝説（聖神社）と略称。

「昔、朱雀天皇の頃、摂津の国、住吉の里に阿部保名という人が住んでいました。妻の名前は葛の葉といい、身体が虚弱で、里帰りして養生していました。

保名は妻の病気全快と俊児誕生を祈って、当時最も信仰の厚かった信太大明神に参籠しました。斎戒沐浴して、池の堤に立っていると水面に白狐の影が映ったので不思議に思っふり返ると一匹のネズミが走ってきました。獵師に追われて傷ついた白狐がねずみに化けて下ってきたのです。しばらく袖に隠し山中に放しました。(中略)

保名が結願の夜、疲れはてて拝殿前で眠っていると、衣冠で身を飾った白髪の老人が現れて、「おまえは日頃から寝食を忘れて信心しているので、願いは必ず成就するだろう、妻の病気は全快し、俊児も近く賜るだろう。少しも疑うなかれ。」という朗々とした声に目覚めました。

間もなく妻は俊児を出産しました。夫婦は心から喜び大切に育てました。誕生後百日余日たった夜の事です。にわかに家中が光り輝きました。

妻は白狐神に変身し「われこそは信太大明神がおまえの比類のない信心をあわれみ、稲荷大明神と相談して、おまえの妻となり願いの通り俊児を授けたのである。今は、神の命で帰るところである。」と告げるといずことなく消えていきました。夜も明けて、障子を見ると和歌が書かれていました。

恋しくば尋ね来てみよ和泉なる

信太の森のうらみ葛の葉

この子はやがて成長し天下にその名を知られるようになった陰陽博士そのひとです。」(和泉市教育委員会 2012)⁷

同じく信太の森の鏡池史跡公園信太の森ふるさと館の常設展示図録で、「葛の葉伝説其ノ一～聖神社周辺に伝わるおはなし～」として同じ伝説が記載されている。歌を残して白狐が姿を消した後には、本当の葛の葉が病を治して帰ってきた。⁸

平成九年三月三十一日、白狐が水面に映った池の信太の森の鏡池が市指定史跡に指定された。和泉市教育委員会が作成した鏡池の説明看板には、葛の葉伝説(聖神社)と思われる伝説の内容が記載されている。狐女房が信太に帰った後、保名は童子を連れて信太の森を訪れて水面の葛の葉と別れを惜しんだとされている。

(3) 高梨氏が登場する信濃堂の伝説

高梨氏が登場する信濃堂にまつわる伝説。以下、信濃堂の伝説(高梨氏)と略称。



図2 聖神社(撮影:山本)



図3 鏡池(撮影:山本)

信濃堂の伝説(高梨氏)は、和泉国絵図を作成するためにまとめられた『泉邦四縣石高寺社旧跡并地侍傳』に書かれたものであったようである。⁹

「信州更科群に住む三人の地侍が、西国三十三観音霊場の巡礼に出かけた途中、信太付近の谷川の石橋の下で、一人の女が隠れているのを見て不審に思っ事情を問いた。その女は信太の女で、夫との仲がうまくゆかず逃げ出してきたが、貴方がたを見て夫の追手がかかったのかと思っ隠れたのです、と答えた。もとの夫にさえ逢わなければどこへ行ってもよいというので、巡礼の一行に加えてそのまま信濃の国に連れて帰った。三人のうち一人が独身者で、彼女と親しくなっ結婚し、九年間に三人の子をもうけた。ある時三才になる末の子が、母の昼寝をしている姿を見たら尻尾が出ているので、驚いて父親に告げた。父親は驚いて妻をゆり起こしたので、妻はとうとう素性がばれたと思っ、その夜短冊に

恋しくハ 尋ね来て見よ わがやどハ
信太の森のうらミ葛葉

の一首を残して姿を消した。

兄弟三人の中、上の二人は高梨姓を名のり、村上義清の旗本となって武田信玄と戦って戦死し、下の弟は母の姓をとって信田を名のり難を免れた。そして母の歌をたよりに信太へきて母をさがした。

その前に、ある信太の女の夢にひとりの女があらわれて「私は信太明神の若御前の眷属で、事情があって信濃へ下って三人の子を生んだが、恥かじめを受けたので帰ってきた。今宵自殺しようと思うが、若御前の前をはばかりて土生村の宮前で死ぬ」と告げた。その女が夫と共に土生の宮の前へ行ってみると、舌をかみ切って死んでいる狐を発見した。そこで丁寧に葬って塚を造った。

信田はこの話をその女から聞いて大へん悲しみ、土生の宮前の小塚を弔い、村人に頼んで堂を建て、田地を買って寄進し、堂守をおいて信濃に帰った。」(藤村義彰 2000)¹⁰

(4) 赤井信濃守が登場する信濃堂の伝説

次に、赤井信濃守が登場する信濃堂にまつわる伝説。以下、信濃堂の伝説(赤井信濃守)と略称。信濃堂の伝説(赤井信濃守)は、大阪府和泉市太町に現存する菩提寺にある地藏尊の地藏菩薩の霊験のひとつとして、『泉州信太藪林山菩提寺地藏尊畧縁起』に書かれたものであったようである。¹¹

「昔、赤石信濃守という人が、死別した妻子の供養のため、熊野参詣をしようと思立ち、和泉国の小栗街道を通りかかったところ、とても美しい女性が大きな石のそばに立っていました。

信濃守がどうしてそんな所に立っているのかと尋ねると、女性は「両親の供養のために熊野参詣をしようと思家を出てきましたが、思いのほか難所が多いので、どのように行けばよいのかと思案しています。」と答えました。これを聞いた信濃守は、「熊野参詣ならば、私も同じ身の上。よければともに参ろう。」といい、五、六町ほど南にある拝片村(伯太村)まで一緒にやってきました。まだまだ先は長く、険しい道のりが続くだろうと、信濃守があたりを見回すと、不思議なことに、今見ている場所が、話聞いた熊野の景色とそっくりなことに気付きました。信濃守は思っていた道のりと違うとは思いましたが、あまりに似ていた

ので、これこそ熊野権現に違いないと思い、女性とともに逗留し、そこにあった新宮堂へお参りしました。

そして、お互い身寄りがいない寂しい境遇であることを知った信濃守は、女性にこう言いました。「同じ寂しい身の上、よければ一緒にならんか。」こうして二人は、信濃で夫婦となり、十二年の間に丸雪、初雪、村雨という三人の女の子が産まれました。

そんなある日のことです。娘の初雪が「母さまの後ろにある尻尾が怖い」といって泣き出しました。長年隠してきた本性をわが子に見られてしまった母親は、しまったと思いましたが、どうすることもできません。悔み悲しみながら、障子に恋しくば 尋ね来て見よ いずみな

信田の森の う羅みくずの葉

という歌を書き残して、消え去ってしまいました。

残された信濃守と三人の娘は、歌を頼りに、母を探そうと信田の森へやってきました。菩提という所で辻堂を見つけ、中を覗いてみると、古いお地藏様があったので、四人は手を合わせて、「地藏菩薩の大悲のご恩でどうかもう一度母に会わせて下さい。」と涙ながらに祈りました。すると、野狐が突然、姿を現したのです。

信濃守が、「その姿では本当にわが妻かどうか分からないし、子どもたちも怖がる。どうか昔の姿を見せておくれ。」と言うと、狐は辻堂の後ろに隠れ、女性の姿になって現れました。

三人の娘たちは、嬉しさのあまり、「私たちを置き去りにして帰ってしまうなんてひどい」と言っ



図4 菩提寺延命地藏尊(撮影:山本)

て、母に縋りつこうとしましたが、女性は逃げるように森の奥へと隠れ、消えてしまいました。親子は悲しみ、これが本当の別れであることを悟ると、近くのトロス池の中に卒塔婆を立てて弔いました。そして、一緒に暮らすことを諦め、信濃へと帰っていきました。

その後、狐が女性に化けて立っていた熊野参詣道の大きな石は、「化石」、親子が後に弔いのために逗留した場所は「信濃堂」と名付けられ、新宮堂の石の鳥居とともに残されました。」(信太の森ふるさと館 2018)¹²

第2章 信太地域周辺に伝わる 狐女房譚の比較

1 比較

次に葛の葉伝説(信太森葛葉稲荷神社)、葛の葉伝説(聖神社)、信濃堂の伝説(高梨氏)、信濃堂の伝説(赤井信濃守)を説話の要素ごとに切り分けて比較を行っていく。比較するのはそれぞれの伝説によって差異が大きくみられる、夫・狐女房・夫の経緯・狐女房の姿と接触・神託・子・正体の露見・再会・終結という九つの要素とする。

○夫と狐女房

それぞれの伝説に登場する夫と狐女房の固有名詞について比較すると、葛の葉伝説では狐女房譚で多く見られるように夫は安倍保名、狐女房は葛の葉とされている。対して、信濃堂の伝説には安倍保名や葛の葉の名前はみられない。信濃堂の伝説(高梨氏)では、夫は信州更科郡に住む三人の地侍のうち独身であった高梨氏、狐女房の名前は明かされていない。信濃堂の伝説(赤井信濃守)では、夫は赤井信濃守、こちらも狐女房の名前は明かされていない。

○夫の経緯

これは四つの異類婚姻譚の始まりの場面で、夫がどのような経緯で信太にいたのかの比較である。葛の葉伝説(信太森葛葉稲荷神社)では、父の保明が豪族に騙されて代々持っていた所領を没収されたために、家の再興を願って大阪市阿倍野の里の保名は信太森葛葉稲荷神社に日参していた。葛の葉伝説(聖神社)では、まず病弱である妻の葛の葉が里帰りして養生している。保名はそんな妻の病氣全快と俊児誕生を祈って信太大明神に参籠していた。信濃堂の伝説(高梨氏)は、信

表1 比較(制作:山本)

	夫	狐女房	夫の経緯	狐女房の姿と接触	神託	子	正体の露見	再会	終結
葛葉 稲荷 神社	安倍 保名	葛の葉	家の再興のために 日参	狩人に追われて 傷をうけた白狐を助ける 白狐は葛の葉に化け、保 名を介抱する	なし	童子丸 (安倍晴明)	庭で乱菊を見て故 郷を思い、本性を 現す	なし	これまでになか った葛が社頭一 面に生い茂って いた
聖 神社	安倍(阿 部) 保名	葛の葉	妻の葛の葉が里帰り 保名は信太大明神に参籠	鏡池に白狐が映る ネズミを狐師から匿う	信太大明神 病氣全快と 俊児誕生を 預言	のちの安倍晴明	子誕生百日余り 後、家中が光り出 して白狐に 信太大明神の使 いと話す	水面に映る 白狐	本当の妻が帰宅 神から授かった 子を大切に育て る
信 濃 堂 高梨	高梨	名前なし	信州更科郡に住む三人の地侍 が、西国三十三観音霊場の巡 礼を行っている	石橋の下で人間の女性が 隠れている 元夫から逃げて いると話す	なし	男の子が3人 (後に未だけが信 田姓)	未が母の着物の裾 から尾が出ている と気付く	未が探す狐 は自害	塚を造り、信濃 堂を建て、信濃 に帰る
信 濃 堂 赤井	赤井 信濃守	名前なし	死別した妻子の供養のために 熊野参詣	小栗街道の大きな石の傍 に人間の女性 両親供養のために熊野参 詣	なし	女の子が3人 (丸雪、初雪、村雨)	初雪が母の尾に気 付く	全員で探し に来て、地 蔵に祈り野 狐と再会。 人に化ける	トロス池の中 に 卒塔婆を建て信 濃に帰り逗留し た場所が信濃堂 と名付けられる

州更科群に住む三人の地侍が西国三十三観音霊場の巡礼を行っている途中であった。信濃堂の伝説（赤井信濃守）では、赤井信濃守が死別した妻子のために熊野参詣をしていると巡礼について触れられている。

実際、信太地域には熊野街道（小栗街道）が通っていた。しかし、葛の葉伝説（信太森葛葉稲荷神社）と葛の葉伝説（聖神社）では、熊野街道の近くに位置していたのにも関わらず巡礼については触れられていない。

熊野街道（小栗街道）は京都や大阪から紀州に通じる官道で、人々は熊野本宮に参詣するために熊野街道を通った。熊野参詣や熊野詣とよばれていた。熊野参詣という言葉は十世紀末頃より記録に登場し始め、庶民だけでなく皇族や貴族も相次いで参詣したとされる。熊野街道には九十九王子とよばれる熊野神社の末社の王子社が存在したことが特徴としてあげられる。これらは熊野本宮の熊野権現の分身を祀っていたところであり、参詣者が奉幣などを行った。信太には篠田王子が祀られていた。¹³ 現在は住宅街の一角に篠田王子跡という石碑が建てられているのみである。



図5 篠田王子跡（撮影：山本）

社会学・民俗学者の沖浦和光氏は、熊野街道にある阿部王子の近くには安倍晴明誕生の地であるとされる安倍晴明神社があることから、ここから同じ熊野街道の葛の葉伝説と結びつくのは自然な流れではないかと指摘している。さらに、これらを伝承していったのは芸を持つものであるとも述べている。¹⁴

○狐女房の姿と接触

葛の葉伝説（信太森葛葉稲荷神社）では、保名が狩人に追われた白狐を助ける。その後助けられた白狐は葛の葉という人間の女性に化けて保名を介抱する。狐から人間への変身である。葛の葉伝説（聖神社）では、保名が池の水面に白狐の影を見て振り返ると、ネズミが走ってくる。そのネズミは猟師に追われた白狐が化けたもので、保名はそのネズミを袖に隠し山中に放す。狐からネズミへの変身。信濃堂の伝説（高梨氏）では、信太付近の谷川の石橋の下で人間の女性が隠れている。その女性は信太の女で夫との仲がうまくいかず逃げてきたと話す。狐から人間に変身しているが、伝説の中では最初の変身は描かれない。信濃堂の伝説（赤井信濃守）では、小栗街道の大きな石のそばに人間の女性が立っていて、両親の供養のために熊野参詣しようと思って家を出てきたと話す。こちらも信濃堂の伝説（高梨氏）同様、狐から人間に変身しているが最初の変身は描かれていない。

どの伝説においても狐は人間の女性の姿に変身して人間の夫の前に現れ、婚姻が成立している。

○神託

葛の葉伝説（信太森葛葉稲荷神社）、信濃堂の伝説（高梨氏）、信濃堂の伝説（赤井信濃守）には見受けられず、葛の葉伝説（聖神社）にのみお告げがみられる。

○子

葛の葉伝説では童子丸（のちの安倍晴明）であるとされる。信濃堂の伝説（高梨氏）では、子は男児が三人生まれて末の子だけのちに信田姓を名乗る。信濃堂の伝説（赤井信濃守）では、子は長女が丸雪・次女が初雪・三女が村雨と名付けられる。

子の性別と人数に対し、中村とも子氏は男子一人子に定着しているものは狐女房譚全体の二割ほどであると指摘。本来の狐女房には男子一人子という要素が絶対条件ではなかったのだらうと推測している。

○正体の露見

この場面では何らかの原因によって狐女房の本当の姿、つまり狐という正体が夫または子に露見

する。葛の葉伝説（信太森葛葉稲荷神社）では、葛の葉が庭先の乱菊を見て故郷を思って正体を現し、童子丸に見られる。葛の葉伝説（聖神社）では、子の誕生後百日余日たった夜に家中が光り輝いて白狐神に変身する。そして信太大明神の神託の通り俊児を授けたと保名告げる。信濃堂の伝説（高梨氏）は、末の子が昼寝をしている母が尻尾を出していることに気付く。信濃堂の伝説（赤井信濃守）では、次女の初雪が母の後ろに尻尾があるのを見つける。

四つの狐女房譚のうち、葛の葉伝説（聖神社）にのみ狐女房が自らの正体を明かすという場面が見られる。同じく葛の葉伝説（聖神社）が信太地域に伝わる他の狐女房譚と異なるのは、神託がある点である。他の狐女房譚で多く見られる、意図せず狐女房の正体が露見してしまうというわけではなく狐女房が自ら正体を明かすのは、神託の通り俊児を授けたと保名に伝える必要性があったからであると考えられる。

○再会

正体が露見した、正体を現した狐女房は、「恋しくば」の歌を残して夫や子の前から姿を消す。その後葛の葉伝説（信太森葛葉稲荷神社）では、保名と童子丸が信太を訪れるも葛の葉と再会できない。葛の葉伝説（聖神社）でも保名と人間の妻の葛の葉に化けた白狐との再会は水面に映る白狐の姿としてあっている。信濃堂の伝説（高梨氏）では、信田姓を名乗る末の子が信太を訪れる。しかし、夢の中で人間の女性の姿で現れた狐女房を見て狐女房のこれまでの経緯を聞いたという信太の女性の証言で狐は自害していたことがわかる。土生の宮前の小塚を弔うことはできたが生きている母との再会は叶わなかった。信濃堂の伝説（赤井信濃守）では、赤井信濃守と三人の娘が信田の森を訪れる。菩提寺の地蔵堂を見つけそのお地蔵様に赤井信濃守と三人の娘が祈ると、野狐が現れる。赤井信濃守が人間の姿を見せてほしいと頼むと、狐女房は堂の後ろに隠れて人間の女性の姿になって再び現れた。

ここで思い出しておきたいのは、信濃堂の伝説（赤井信濃守）は大阪府和泉市太町の菩提寺にある地蔵尊の地蔵菩薩の靈験のひとつとして『泉州

信太叢林山菩提寺地蔵尊畧縁起』に書かれていたということである。¹⁵ 伝説の中で赤井信濃守と三人の娘は、「菩提という所で辻堂を見つけ、中を覗いてみると、古いお地蔵様があったので、四人は手を合わせて、『地蔵菩薩の大悲のご恩でどうかもう一度母に会わせて下さい。』」と菩提の地蔵菩薩に確かに祈っている。このことから信濃堂の伝説（赤井信濃守）は、熊野の巡礼について意識されているというだけではなく、菩提寺の地蔵尊の地蔵菩薩の靈験としての意味合いが強いことがわかった。

○終結

最後にそれぞれの伝説の終結について。葛の葉伝説（信太森葛葉稲荷神社）では、今までなかった葛が神社の社頭一面に生い茂っていたとある。葛の葉伝説（聖神社）では、本当の妻である人間の葛の葉が帰ってくる。その後保名と本当の葛の葉は、成長してのちに安倍晴明となる子を大切に育てた。信濃堂の伝説（高梨氏）では、堂を建てて田地を寄進、堂守を置いて信濃に帰る。信濃堂の伝説（赤井信濃守）では、トロス池の中に卒塔婆を立てて弔うと、信濃へと帰っていった。トロス池とは漢字で取石池と書き、和泉市に隣接する高石市の取石六丁目に存在した池のことを指していると考えられる。この取石池は万葉集でも歌枕として詠まれている池であり、取石池の名前に因んだ取石村という村もかつて存在していたようである。¹⁶

ところで、二つの信濃堂の伝説には、狐女房譚に多く見られる夫は安倍保名であったという固有名詞が当てはまらないとは何度も述べていることである。では、高梨氏と赤井信濃守とはどのような人物のことを指しているのだろうか。

信濃堂の伝説（高梨氏）では兄弟のうち上二人が夫の姓である高梨、末の子が狐女房の信田姓を名乗ったとある。この高梨氏とは北信濃国人であった高梨氏のことでありと考えられている。高梨氏が村上義清の旗本であったかはわかっていないが、川中島の戦いでは武田信玄が率いる武田軍を相手に上杉軍に村上義清と高梨政頼が参加している。¹⁷ しかし、高梨氏がなぜこの伝説の登場人物となっているのかは不明のままである。信濃堂

葛の葉伝説 —和泉市信太地域における狐女房譚の比較研究

の伝説（赤井信濃守）においては、武将であった赤井氏のことを指しているのか。こちらも残念ながら信濃堂の伝説や和泉国、信太地域に直接関係がありそうな事柄の発見には至らなかった。

ここで狐女房が夫や子に向けて残していった歌についても比較を行いたい。

表2 歌（制作：山本）

	歌	書いたもの
葛葉稲荷神社	恋しくば 尋ねてきてみよ 和泉なる 信太の森の うらみ葛の葉	障子
聖神社	恋しくば 尋ね来てみよ 和泉なる 信太の森の うらみ葛の葉	障子
高梨氏	恋しくハ 尋ね来て見よ我がやどハ 信太の森のうらみ葛葉	短冊
赤井	恋しくば 尋ね来て見よ いずみなる 信田の森の うらみくずの葉	障子

信濃堂伝説（高梨氏）は他の伝説と比べてみると、「和泉なる」または「いずみなる」という和泉国を示すという言葉は入っていない。しかし、信太の森という地名は入っており、歌の内容自体に差異はみられない。他の伝説たちと異なるのは、歌を短冊に書いたという点である。

葛の葉伝説（信太森葛葉稲荷神社）、葛の葉伝説（聖神社）、信濃堂伝説（赤井信濃守）に登場する歌は障子に書かれている。狐女房が歌をどこに書いたかということについて、中村とも子氏は「昔話『狐女房』を考える 一口承が受容するものしないもの」の中で、障子に書くという、「このような描写の具体性は口頭伝承本来のものではなく、芝居からの視覚的な記憶が口頭伝承に投影されたのではないかと考えられる。」（中村とも子1995）¹⁸と指摘している。狐女房譚がモチーフとなっている芸能については後述の第3章にて触れることとする。

葛の葉伝説（信太森葛葉稲荷神社）と葛の葉伝説（聖神社）では、夫と初めて接触した時の狐女房の姿は白狐であった。そして、狩人や猟師から狙われていたところを助けてもらった後に人間の葛の葉に化けて婚姻を結んでいることから、葛の葉伝説は報恩がテーマとなっているのがわかる。

信濃堂の伝説（高梨氏）と信濃堂の伝説（赤井信濃守）では、初めから人間の女性の姿に化けている狐女房が夫となる人物の巡礼に合流する。ど

ちらも巡礼が意識されていると考えられる内容が含まれている。そして、正体が露見する場面と再会する場面まで正体が狐であることは語られない。信濃堂伝説のどちらも白狐との記載のある文献は見当たらず、狐や野狐と書かれている。

狐女房が四つの狐女房譚の中で見せた変身は以下の通りであった。

葛の葉伝説（信太森葛葉稲荷神社）は、
白狐→人間（葛の葉）→白狐。

葛の葉伝説（聖神社）は、
白狐→ネズミ→人間（葛の葉）→白狐神→水面に映る白狐。

信濃堂の伝説（高梨氏）は、
人間→狐（尻尾）→（夢の中で）人間の女性→狐。
信濃堂の伝説（赤井信濃守）は、
人間の女性→狐（尻尾）→狐→人間。

白い動物は神の使いであるといった考えがある。これには、春日大社の白鹿などが例にあげられる。それは葛の葉伝説においても例外ではないようである。信太森葛葉稲荷神社は葛の葉伝説（信太森葛葉稲荷神社）の葛の葉姫は稲荷大明神第一の御命婦であるとしており、葛の葉伝説（聖神社）では狐女房は白狐神であると保名に正体を明かしている。さらに、特に白狐であるといった記述がみられなかった信濃堂の伝説（高梨氏）でも狐女房自身が信太明神の若御前の眷属であったと発言している。信濃堂の伝説（赤井信濃守）では、狐が神の眷属や命婦であったという記述はみられない。他の説話と大きく異なるのは次の不可思議な体験が説話の中に組み込まれているという点である。「まだまだ先は長く、険しい道のりが続くだろうと、信濃守があたりを見回すと、不思議なことに、今見ている場所が、話に聞いた熊野の景色とそっくりなことに気付きました。信濃守は思っていた道のりと違うとは思いましたが、あまりに似ていたので、これこそ熊野権現に違いないと思い、女性とともに逗留し、そこにあった新宮堂へお参りしました。」（信太の森ふるさと館2018）¹⁹さらに、信濃堂の伝説（赤井信濃守）は大阪府和泉市太町の菩提寺にある地藏尊の地藏菩薩の霊験のひとつとして伝えられてきたことであるから、神の使いの白狐として描かれてこなかったのではないかと推測する。

これらの比較を踏まえて、先述にあげた吉田幹生氏が指摘している異類婚姻譚の方向性について信太地域に伝わる四つの狐女房譚を当てはめてみる。

I 子の誕生を語り始祖伝承としての性格が強いもの

子の童子丸がのちの安倍晴明であるとされる葛の葉伝説（信太森葛葉稲荷神社）、葛の葉伝説（聖神社）が当てはまる。

II 異類としての存在を強調し忌避する性格が強いもの²⁰

それぞれの狐女房譚に狐との「別れ」を強調する場面があり、狐女房が神の使いであったり地藏菩薩の靈験の一つとして伝えられてきた伝説であったことからこの性格が強いとは考えられない。

III 神仙譚の枠組みの中で語ろうとするもの

他の安倍晴明伝説では蘆屋道満との法術較べなど安倍晴明の持つとされる神通力についての場面が多く描かれている。だが、葛の葉伝説（信太森葛葉稲荷神社）、葛の葉伝説（聖神社）に伝わる葛の葉伝説では子のその後は描かれておらず、そのような場面はみられない。信濃堂の伝説（赤井信濃守）においては、そもそも菩提寺にある地藏尊の地藏菩薩の靈験のひとつとして伝えられていることであるから、神仙譚にあたると言える。

次にどこにも当てはめられていない信濃堂の伝説（高梨氏）について考える。子の存在も描かれているため、I 子の誕生を語り始祖伝承としての性格が強いものに当てはまるのではないかと考えた。しかし、兄弟三人のうち狐女房と別れた後のことが具体的に語られているのは村上義清の旗本になり武田信玄と戦って敗れたとされる高梨姓を名乗った上の二人である。伝説の後半部分では彼らではなく信田姓を名乗って生き延びていた末の子がメインとなって進んでいく。しかし、末の子の名前が出て来てのちに活躍をみせるといったことが描かれるわけではなく、I 子の誕生を語り始祖伝承としての性格が強いものには当てはまらないだろう。II 異類としての存在を強調し忌避する性格が強いものは他の伝説と同じく別れの場面が強調され、末の子が狐女房を探しにきていることから当てはまらない。III 神仙譚の枠組みの中で語ろうとするものについても、信太の女性の夢の中に

出てきてはいるが、神仙譚ではないだろう。以上から、信濃堂の伝説（高梨氏）は三つの方向性の中ではっきりと適したものがないように思われる。

2 安倍晴明と信太陰陽師・藤村氏

信太地域には信太暦と呼ばれる暦が存在した。「神社側の伝承によれば、聖（日知り）の神の使として舞大夫が村々を廻って神楽を舞い、併せて農業暦を農家の人々に売り歩いていたのがはじまりで、それはたぶん江戸時代時代の初めか、或いはもう少しさかのぼって室町時代の終り頃かもしれないという。」（藤村義彰 2000）²¹ ここでいう神社は聖神社のことである。様々な文献にはその存在が記されていたものの、当時発行された数の少なさからかしばらく発見には至っていなかった。しかし、昭和 50 年代に泉大津の個人宅で発見されたことで信太暦の研究が進んだようである。²² 信太暦は他に泉州暦や舞暦と呼ばれていた。泉州暦の由来は和泉市が大阪の中でも泉州地方であることからであると考えられる。舞暦と呼ばれているのは、信太地域には舞村と名付けられた村があったことに由来する。

舞村周辺には陰陽師が居住していた。そして、信太暦（舞暦・泉州暦）を発行していたのが信太陰陽師と名乗っていた藤村氏であった。藤村氏の子孫である藤村義彰氏は、「舞暦の舞台となった信太郷の舞村は、中世熊野街道（のち小栗街道）の取石宿のあったところで、取石池の南に連なる一画である。信太大明神（聖神社）に舞を奉納する大夫が住んでいたところから、街道の東側が取石から分れて舞村と呼ばれるようになった。慶長九年（一六〇四年）につくられた『舞村指出帳』には名受登録人の中に源三郎、乙千代、与太郎、甚三郎などの名前と並んで、大夫・幸大夫・弥二郎大夫と大夫の名がつく者が三名おり、聖神社の舞大夫が住んでいたことを示している。」（藤村義彰 2000）²³ と舞村について述べている。舞大夫が居住していたことは『泉邦四縣石高寺社旧跡并地侍傳』に記述があるが、沖浦和光氏は「この文書では中世の取石宿が近世に入って舞村になったようにも読めるが、取石宿に隣接して陰陽師集団が居着いた可能性もある。あるいは取石宿に僧体の非人が入り込んで、声聞師として遊芸や陰陽師に

進出したのかもしれない。」(沖浦和光 2004)²⁴と推測している。

聖神社と藤村氏がいつから関係を持っていたのかは明らかになっていないが、「寛政十一年(1800)の和泉五社惣社に聞き取りの記録に『一、居舞壺人 舞村二甚太夫(藤村氏)と云て有之、往古より神田之内より米二石宛取、尤往古より古き書物を所持致し居候、田地内高』とある。甚太夫(藤村氏)は、往古より聖神社の神田より二石を給されて、神社の構成に近い存在であった。」(信太の森の鏡池史跡公園 協会 研究グループ 土屋佳邦他 2017)²⁵との記述がある。さらに聖神社が主祭神として祀る聖神は日を知る神であり²⁶、暦を作成していた藤村氏にとっても重要な存在であったと考える。

藤村氏は信太陰陽師と名乗っていたわけであるが、平安時代に活躍した安倍晴明と同様の陰陽師であったかと言えばそうではない。陰陽師は官人陰陽師と民間陰陽師の二流に分けられる。官人陰陽師とは宮廷お抱えの陰陽寮に属していた陰陽師で、貴族など地位の高い人物の依頼を受けていた。民間陰陽師は言うなれば非正規の陰陽師である。特に南北朝以後、地域に住み着いた民間陰陽師たちは地方の寺院などに身を寄せて地方暦を発行、祈祷や占いを行う者が多くみられた。それらの活動はやがて芸能につながり全国的に活動の幅を広めていったとされる。安倍晴明は官人陰陽師、藤村氏は民間陰陽師に分類される。

数々の安倍晴明の説話で描かれている場面についても、平安時代末期から鎌倉には京都周辺に止まっていた。しかし、それが南北朝以降になると全国に拡大していつている。「南北朝動乱以後、地方に陰陽道を受容する階層が形成され、晴明を陰陽道の祖と祭る陰陽師、唱門師、密教僧、修験者等が全国に広がり、そこから晴明伝説が発生して来たと考えられる。」(信太の森の鏡池史跡公園 協会 研究グループ 土屋佳邦他 2017)²⁷ことが要因として考えられている。

ここで土御門家について触れておきたい。土御門家は安倍晴明の直系で、天文・歴教・陰陽道を司る公家であった。

福井県大飯郡おおい町名田庄納田終にはあおい町暦会館がある。



図6 暦会館 (撮影：山本)

土御門家について館長よりお聞きした話をまとめると次の通りである。

安倍晴明の子孫たちは応仁の乱(1467年以降)の戦火から逃れるために、南北朝時代に祭祠領地として与えられていた荘園の一つである福井県の若狭、納田終に逃れた。そこで安倍有宣(1433～1514)の頃に土御門を称するようになり、有春(1501～1569)、有脩(1527～1577)の時代まで約90年に渡って納田終に居住した。関ヶ原の戦いの翌年になると出仕の命を受けて京都に帰還している。この間朝廷の仕事を全く行っていなかったかといわれるとそうではなく、有春、有脩は度々公務を帯びて上洛していたようである。

土御門家は天和三年(1683)に朝廷から諸国の陰陽師を支配する権限が認められ、民間陰陽師たちは門下に入っていく。藤村氏も例に漏れず土御門家の門下に入り、農業暦を発行するなどの民間陰陽師としての活動を継続する。同じ信太地域にある信太森葛葉稲荷神社は庄屋森田氏が若御前ノ宮を屋敷神に取り込んだ個人所有の社で、土御門家の門下には入らなかったようである。²⁸

以降暦を発行するには土御門家の許可が必要となっていたが、信太暦(舞暦・泉州暦)は二度発行が停止されている。「藤村氏は、享保七年(1722)売暦行為により発行停止処分を受け、信太暦の発行が出来なくなった。宝暦年間の改暦により再度暦の発行を許されるが、その後、売暦を行ったため、再び禁止された。以後、幾度か許可を願い出

るが許されず、明治維新を迎えることとなる。)(信太の森の鏡池史跡公園 協力会 研究グループ 土屋佳邦他 2017)²⁹ というのが二度信太暦の発行が停止された理由であった。

藤村氏の子孫である藤村義彰は、土御門家と信太陰陽師・藤村氏との関係性について次のように述べている。「藤村家は天和三年(一六八三年)以降は土御門家の支配をうけ土御門の免許によって暦を生産した。ただ土御門との関係で他の暦師とかなり異なる点は、他の暦師が京町奉行とか奈良奉行とかいう幕府の期間か、或いは幕府の天文方から写本暦を受け取ったにも拘らず、藤村家に対しては、土御門家が京の大経師から特別に融通してもらった写本暦を直接手渡されていた事実である。この特別扱いが何を意味するのかよく分からない。いわば内輪の特例である。藤村家をはっきりと安倍晴明の子孫であると書いている書物もある、何よりもその住む地が、安倍晴明が信太明神の命婦の白狐の子という晴明伝説発祥の信太である、その信太大明神をまつる聖神社の祭礼に舞を奉納した舞大夫であり、時には神官もつとめた家柄である。しかも晴明伝説の原案とも考えられる信濃堂伝説の池取石宿の一隅にある取石池畔に居をかまえていたという事実がある。偶然にしてはよく出来すぎている。」(藤村義彰 2000)³⁰

さらに藤村氏と同じ姓を持つ奈良の暦師との関係については次のような推測をしている。「奈良の暦師は後醍醐天皇の頃、京都の動乱のために陰陽寮の陰陽生が地方に逃れた際、一部が奈良に住み着いたといわれている。和泉の暦師藤村家と同姓であり、藤村一族が奈良と和泉に分れて住み着いたのか、或いは奈良に移ってから更に和泉へ分かれたのか、いずれにしても奈良との関係が考えられる。」(藤村義彰 2000)³¹ 舞暦と奈良暦(南部暦)が類似する点が多いことや、和泉の藤村氏の暦が発行停止になった際には奈良暦(南部暦)を買い受けていたことから、和泉の藤村氏と奈良の陰陽師に何か関係性があるのではないかと述べている。

次に藤村氏が民間陰陽師として置かれていた立場について検討していきたい。平安期に入り律令制度が解体すると、民間陰陽師は民を惑わす呪術を使う者として賤視されるようになる。「かつての多様な職能民のうち、商工業者、廻船人、狹義

の芸能民の一部は、十五世紀以降、列島各地の津・泊・浦・浜などに成立していった都市に屋をもち、都市民としての立場を固めていったのに対し、依然として遍歴をつづける呪術的・宗教的・遊芸的な芸能民の多くは、次第に社会から賤しめられるようになったのである。」(網野善彦 1998)³²

民間陰陽師らは呪術を使うものとして賤視されていき、信太の取石宿があった、もしくは取石宿に隣接していたと思われる舞村に信太陰陽師は居住していた。そんな信太陰陽師・藤村氏は聖神社の聖の神の使として舞を奉納した舞大夫であると考えられており、併せて農業暦を売り歩いている。さらに聖神社から二石与えられて神社の構成員に近い存在であったとも述べられている。そして、葛の葉伝説は安倍晴明が登場し、子の誕生を語り始祖伝承としての性格が強くみられる。対して信濃堂の伝説は、同じ信太地域であるのに安倍晴明は全く登場しない。これらから、信太陰陽師・藤村氏は、官人陰陽師として名高い安倍晴明出生譚を結びつけることで自らの地位をあげようと考えたのではないかと推測する。

第3章 葛の葉伝説と芸能

文芸作品や歌舞伎などの演目において狐女房譚をモチーフにした作品は数多く存在し、現在も人気を博し続けている。その一例と歌舞伎が上演されるとともに多く描かれた浮世絵についてもみていく。

まず、最も古く狐女房譚をモチーフに上演されたのは古浄瑠璃『信太妻』で、これは作者、制作年代ともにわかっていない。正徳三年(1713)には紀海音作の人形浄瑠璃『信太森女占』が大坂豊竹座で初演されているが、狐女房譚がモチーフにされた演目の中で最も知られている作品は『蘆屋道満大内鑑』である。人形浄瑠璃『蘆屋道満大内鑑』は竹田出雲作。古浄瑠璃『信太妻』をもとに創作され、享保十九年(1734)10月に大坂・竹本座で初演された。翌二十年(1735)二月に京都中村富十郎座で歌舞伎化がなされた。

江戸時代後期の浮世絵師である歌川国芳は『木曾街道六十九次』の「妻籠 安部保名 葛葉狐」で描いている。

葛の葉伝説 一和泉市信太地域における狐女房譚の比較研究

嘉永5年(1852)に江戸で上演された演目が描かれたこの浮世絵は、半透明の葛の葉の前には狐のシルエットが浮かび上がっている。後ろの障子には恋しくばの歌が書かれており、これは床に置かれた筆や硯を使って書かれたことがわかる。その障子を開いて覗いているのは保名で、葛の葉の着物の裾を布団に入っている童子が掴んでいるという構図になっている。歌川国芳は同じ嘉永5年(1852)に「江都錦今様国尽」「楠正成 葛の葉」「河内」「和泉」³³で、口にくわえた筆で障子に歌を書く葛の葉の様子を描いている。これは江戸で上演され、坂東しうかが葛の葉を演じた演目のもの。

歌川豊国の「葛の葉狐 中村芝翫・安部の保名 河原崎権十郎」³⁴は文久1年((1861)のもので、葛の葉狐は中村芝翫、安部の保名は河原崎権十郎が演じている。

こちら葛の葉狐が筆を口にくわえて障子に歌を書き、右手で子を抱えて左手には硯を持っている。そしてその様子を安部の保名が覗いているといった構図である。

年代は不明であるが、守川周重の描いた「くずのは 市川門の助」「一子童子 市川弁蔵」「蘆屋道満大内鑑」はこれまでのものとは異なる点がみられる。そちらでは障子ではなく屏風に歌が書かれ、左手に筆を持っている。

そういった狐女房譚をモチーフにした歌舞伎は明治期になっても上演され続ける。明治24年

(1891)3月に歌川国貞が描いた「芦屋道満大内鑑」では、葛の葉を市川団十郎、童子を市川ぼたんが演じている。その浮世絵でも葛の葉が童子を抱きかかえながら、口にくわえた筆で障子に歌を書いている姿が描かれている。

現在も演じられる歌舞伎での狐女房の見せ場について、早稲田大学演劇博物館のホームページでは次のように説明されている。「演じる俳優が舞台で実際に書くのが見どころであり、実は狐である葛の葉の霊力を表すため、左手で書いたり、左右逆の鏡文字や、口で筆をくわえて書いたり」と「曲書き」の技巧を要する。」(早稲田大学演劇博物館のホームページより)³⁵これは初演にはなかったものであるとされており、上演を重ねていく中で進化していった演出の一つであると考えられる。

全国の民間陰陽師系の集落の中には、舞手の太夫と鼓打ちの才蔵の二人一組、または三人以上で万歳(万才)を行ったり地回りの歌舞伎一座を組んだ者たちもいた。藤村家は舞太夫を務めていただけでなく、こうわか舞を行っていたことが『別本泉州記』の記事にあると藤村義彰氏は述べている。「こうわか舞というのは中世の芸能の一つで『舞い』とか『舞々』ともいわれていて越前が元祖で、水干・大口・鳥帽子・直垂の二人または三人で、語り物を適宜に分けて語る、三河万才とよく似た芸能で、楽器も三河万才と同様に鼓と扇拍子を打っていた。」(藤村義彰2000)³⁶という。藤



図7 『木曾街道六十九次』
「妻籠 安部保名 葛葉狐」



図8、9 「葛の葉狐 中村芝翫・安部の保名 河原崎権十郎」

村氏は聖神社の祭礼での舞大夫としてだけではなく、万才と似た芸能を行っていたのならば、信太地域だけではなく他の地域にも訪れていた可能性が浮かび上がってくる。

おわりに

以上が、信太森葛葉稲荷神社周辺、聖神社周辺に伝わる葛の葉伝説、高梨氏と赤井信濃守が登場する信濃堂の伝説の和泉市信太地域における四つの狐女房譚の比較研究を行った結果である。

葛の葉伝説では異類婚姻譚の中でも狐女房葛の葉を夫の保名が助け、その報恩で婚姻を結ぶ。そして生まれた子が童子丸、のちの安倍晴明であるという出生譚の役割が色濃くみられた。葛の葉伝説には他の安倍晴明の伝説にみられるような法術較べなど神通力につながるような記述はみられず、葛の葉と保名・童子丸（安倍晴明）との別れの場面を中心としての記述が残されていた。

信濃堂の伝説は葛の葉や保名や安倍晴明は登場せず、高梨氏と赤井信濃守という人物がそれぞれ夫として登場した。かつての信太地域には熊野参詣を行う巡礼者のための熊野街道が通っており、九十九王子のうち篠田王子が置かれていた。そんな巡礼を行っている人間の男性の前に、人間の女性に化けた狐女房が姿を現し巡礼に合流するというのが信濃堂伝説にみられる特徴であった。同じ信太地域の街道筋に葛の葉伝説の信太森葛葉稲荷神社と聖神社は位置しているわけであるが、巡礼は葛の葉伝説には見受けられない。これらの比較から吉田 幹生氏の指摘する異類婚姻譚の方向性に当てはめて考えた。信太森葛葉稲荷神社周辺、聖神社周辺に伝わる葛の葉伝説は、I 子の誕生を語り始祖伝承としての性格が強いものに当てはまる。

さらに四つの狐女房譚の中でも特に聖神社周辺に伝わる葛の葉伝説は、信太地域にかつて存在した舞村に居住していた民間陰陽師の藤村氏の影響があったと考えられる。彼らは聖神社の聖の神の使として神楽を待っていた舞大夫でもあったとされている。民間陰陽師は呪術を使う者として賤視されていた背景から、聖神社と関係の深かった藤村氏は、安倍晴明を結びつけることで自らの地位

をあげようと考えたのではないだろうかとは私は推測している。

また、赤井信濃守が登場する信濃堂の伝説は、菩提寺にある地藏尊の地藏菩薩の靈験にまつわるものであり、III 神仙譚の枠組みの中で語ろうとするもの神仙譚に当てはまる。しかし、高梨氏が登場する信濃堂の伝説は三つの方向性の中でははっきりと適したものがないように思われる。

今後の課題としては、信濃の人物である高梨氏と赤井信濃守がなぜ大阪府和泉市信太地域に伝わる信濃堂の伝説に登場しているのか、という疑問が残ったままであること。そして、舞大夫としての藤村氏の姿が捉えられなかったことが悔やまれる結果となった。

【注】

- ¹ 中村とも子、1995「昔話『狐女房』を考える—口承が受容するものとししないもの—」『口承文芸研究』口承文芸学会、P99
- ² 同上
- ³ 和泉市史編さん委員会／編、2015『信太山地の歴史と文化』和泉市、P111-112
- ⁴ 吉田幹生、2009「異類婚姻譚の展開：異類との別れをめぐる」『日本文学 特集 人類と異類—古代文学から—』日本文学協会、P12
- ⁵ 信太森葛葉稲荷神社 案内板より
- ⁶ 信太の森ふるさと館 編、2018『信太の森の鏡池史跡公園 信太の森ふるさと館 常設展示図録区葛の葉の世界～信太の森の伝説～』信太の森ふるさと館、P4-5
- ⁷ 和泉市教育委員会、2012『信太の森鏡池—「葛の葉」ゆかりの地』和泉教育委員会、P86
- ⁸ 信太の森ふるさと館 編、2018『信太の森の鏡池史跡公園 信太の森ふるさと館 常設展示図録区葛の葉の世界～信太の森の伝説～』信太の森ふるさと館、P2-3
- ⁹ 信太の森ふるさと館 編、2018『信太の森の鏡池史跡公園 信太の森ふるさと館 常設展示図録区葛の葉の世界～信太の森の伝説～』信太の森ふるさと館、P6、16
- ¹⁰ 藤村義彰、2000『伝説信太の森—うらみ葛の葉』宗教文学研究会、P51-53

- 11 信太の森ふるさと館 編、2018『信太の森の鏡池史跡公園 信太の森ふるさと館 常設展示図録区葛の葉の世界 ～信太の森の伝説～』信太の森ふるさと館、P7、16
- 12 信太の森ふるさと館 編、2018『信太の森の鏡池史跡公園 信太の森ふるさと館 常設展示図録区葛の葉の世界 ～信太の森の伝説～』信太の森ふるさと館、P6-7
- 13 服部英雄、1995「いまひとすじの熊野道・小栗街道聞書」『比較社会文化1』、九州大学大学院比較社会文化研究科、P11-12、
- 14 沖浦和光、1984『日本民衆文化の原郷 被差別部落の民俗と芸能』解放出版社、P12
- 15 信太の森ふるさと館 編、2018『信太の森の鏡池史跡公園 信太の森ふるさと館 常設展示図録区葛の葉の世界 ～信太の森の伝説～』信太の森ふるさと館、P7
- 16 和泉市史編さん委員会 編、2015『信太山地域の歴史と文化』和泉市、P113
- 17 青山征人、2007「中部の景観を歩く：長野県小布施（おぶせ）町のまちづくりは第2ステージへ」『CREC』中部開発センター、P23
- 18 中村とも子、1995「昔話『狐女房』を考える 一口承が受容するものとしなないもの」『口承文芸研究』口承文芸学会、P105
- 19 信太の森ふるさと館 編、2018『信太の森の鏡池史跡公園 信太の森ふるさと館 常設展示図録区葛の葉の世界 ～信太の森の伝説～』信太の森ふるさと館、P6
- 20 吉田幹生、2009「異類婚姻譚の展開：異類との別れをめぐる」『日本文学 特集 人類と異類 —古代文学から—』日本文学協会、P12
- 21 藤村義彰、2000『伝説信太の森 ーうらみ葛の葉』宗教文学研究会、P24
- 22 信太の森の鏡池史跡公園 協力会 研究グループ 土屋佳邦他、2017『陰陽道の世界 前期「和泉地方と陰陽道」後期「陰陽師の生業 一信太暦と信太陰陽師一」』信太の森の鏡池史跡公園 信太の森ふるさと館、P199
- 23 藤村義彰、2000『伝説信太の森 ーうらみ葛の葉』宗教文学研究会、P105
- 24 沖浦和光、2004「陰陽師と渡来文化 ー安倍晴明伝の虚と実一」『しのだ妻の世界』和泉市立人権文化センター、P66
- 25 信太の森の鏡池史跡公園 協力会 研究グループ 土屋佳邦他、2017『陰陽道の世界 前期「和泉地方と陰陽道」後期「陰陽師の生業 一信太暦と信太陰陽師一」』信太の森の鏡池史跡公園 信太の森ふるさと館、P39
- 26 藤村義彰、2000『伝説信太の森 ーうらみ葛の葉』宗教文学研究会、P24
- 27 信太の森の鏡池史跡公園 協力会 研究グループ 土屋佳邦他、2017『陰陽道の世界 前期「和泉地方と陰陽道」後期「陰陽師の生業 一信太暦と信太陰陽師一」』信太の森の鏡池史跡公園 信太の森ふるさと館、P104
- 28 同上 P39
- 29 同上 P201
- 30 藤村義彰、2000『伝説信太の森 ーうらみ葛の葉』宗教文学研究会、P101-102
- 31 同上 P103-104
- 32 網野善彦、1998『平凡社選書 170 日本中世の百姓と職能民』平凡社、P255 より
- 33 「江都錦今様国尽」「楠正成 葛の葉」「河内」「和泉」国立国会図書館デジタルコレクション（請求番号：寄別 8-4-2-2 書誌 ID：000007277886）より引用
- 34 「葛の葉狐 中村芝翫・安部の保名 河原崎権十郎」国立国会図書館デジタルコレクション（請求番号：本別 7-521 書誌 ID：023938823）より引用
- 35 早稲田大学演劇博物館のホームページ「3世中村梅玉「葛の葉」曲書き」<https://www.waseda.jp/enpaku/collection/3206/>（最終アクセス日：2021.01.07）
- 36 藤村義彰、2000『伝説信太の森 ーうらみ葛の葉』宗教文学研究会、P98-99

【参考文献】

- 細田慈人、2017『「信太暦」の発行停止と信太陰陽師藤村氏 ー信太暦に関する史料紹介ー』市史編さん室『和泉市史紀要第27集 近世和泉の村と支配』和泉市教育委員会
- 繁田信一、2006『陰陽師：安倍晴明と蘆屋道満』中央公論新社

繁田信一、2004『陰陽師と貴族社会』吉川弘文館
加藤敦子、2017「狐女房に見る異界：二人の葛葉
が会うこと」『比較日本学教育研究センター
研究年報』お茶の水女子大学比較日本学教育
研究センター、P31-38